

トビウオ通信 (H30 第 3 号)

http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/ (TEL 0855-22-1720)

《平成 30 年度上半期浮魚中長期漁況予報》

平成 29 年度第 2 回対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報 (H30 年 3 月 27 日発表) より、山陰沖のまき網漁業が対象とする主要浮魚の平成 30 年度上半期 (4~9 月) の中・長期的な漁模様の予測をします。

山陰沖における漁況(来遊)予報 [平成 30 年度上半期(4~9 月)]

マアジ:前年並み

マサバ:前年並みか前年を上回る

マイワシ:前年並み

ウルメイワシ:前年を下回る

カタクチイワシ:前年を下回る

※ 本文中で「上半期」は 4~9 月、「下半期」は 10~翌年 3 月 (平成 30 年 3 月は速報値)、「平年」は過去 5 カ年の平均値を示します。

マアジは前年並み

東シナ海~日本海南西海域の漁況

東シナ海~日本海南西海域における大中型まき網によるマアジの漁獲量は、増減を繰り返り、2 万~4 万トンで推移しています(図 1)。

また、鹿児島県から山口県までの沿岸域における平成 29 年 11 月~平成 30 年 1 月の漁獲状況は、前年を下回り、平年並みでした。今後は主体となる 1 歳魚の来遊量から前年並みになると予測されています。

山陰沖の漁況と今後

島根県の中型まき網によるマアジの漁獲量は平成 16 年度以降、2 万~4 万トン程度で推移しています(図 2)。平成 29 年度下半期は 7,618 トンの漁獲があり、前年同期

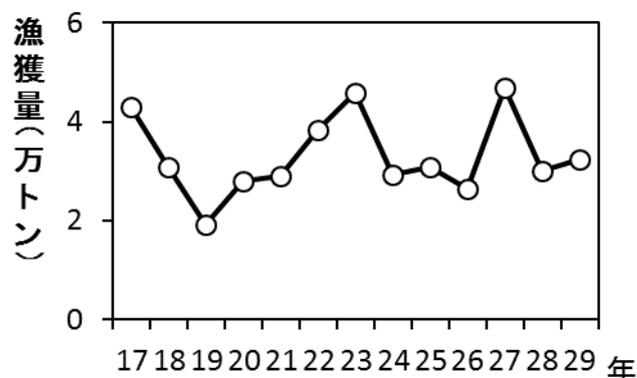


図 1. 東シナ海~日本海南西海域 (大中型まき網) によるマアジ漁獲量の推移

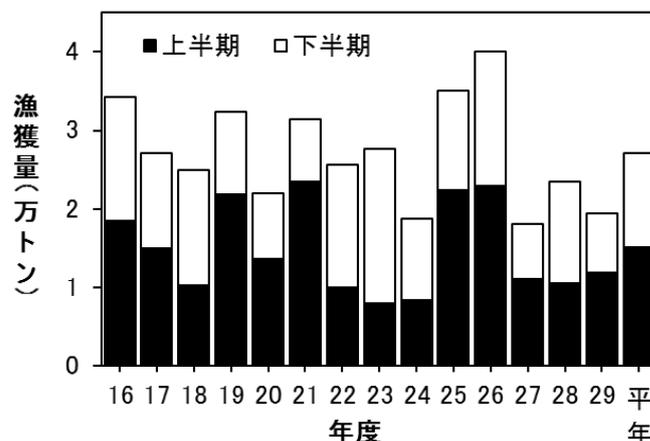


図 2. 島根県中型まき網によるマアジ漁獲量の推移 (平年は H24~28 年の平均値)

(15,123 トン) の 50%、平年同期 (12,481 トン) の 61% でした。

H29 年の漁獲の主体は H28 年生まれ (H29 年時点 1 歳魚) が中心で、上半期の漁獲量は前年並みでしたが、下半期は前年、平年を下回りました。

今後の漁況は、漁獲の主体となる 1 歳魚 (大きさ 15~20 cm : H29 年生まれ) と 2 歳魚 (大きさ 20~25 cm : H28 年生まれ) の山陰沖への来遊状況と、夏季以降漁獲対象となる 0 歳魚 (大きさ 5~15 cm : H30 年生まれ) の加入状況によって決まります。

1・2 歳魚の来遊状況は海水温の影響を大きく受け、5 月にマアジの適生息水温とされる 16℃以上が山陰沖に広がっていると漁獲が多くなる傾向があります。今期の日本海西部海域の 50m 深水温の推移は対馬暖流域・沿岸域の水温が平年並みと予測されていることから、山陰沖も平年並みになると考えられるので、1・2 歳魚の来遊状況も平年並みと予想されます。また、今期に 1 歳魚となる H29 年生まれの加入状況は、直近までの漁獲状況とマアジ新規加入量調査*の結果 (図 3) から前年並みと予測されます。これから山陰沖に加入してくる 0 歳魚の状況は今後調査予定ですが、前年並みとすれば、全体の来遊量は前年並みと予測されます。

*マアジ新規加入量調査：マアジ 0 歳魚の加入量を早期に把握するための調査

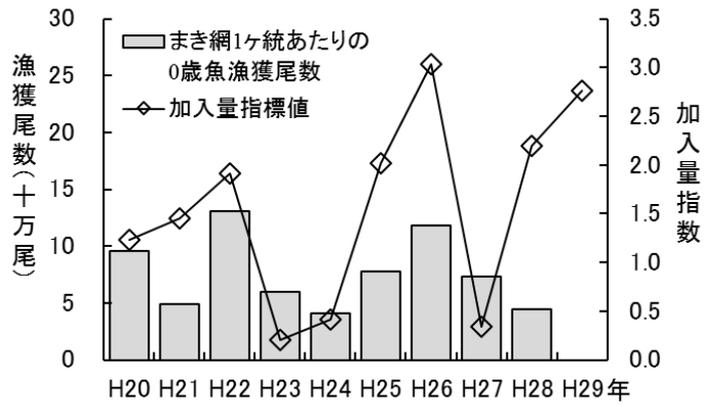


図 3. マアジ新規加入量調査による加入量指数と 6~12 月におけるまき網 (境港) 1 ヶ統あたりの 0 歳魚の漁獲尾数 (H29 年は未集計)

マサバは前年並みか前年を上回る

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマサバの漁獲量は、平成 22 年から平成 26 年まで減少傾向にありましたが、近年は横ばいとなっており、平成 29 年の漁獲量は 3 万 1 千トンでした (図 4)。

山陰沖の漁況と今後

島根県の中型まき網によるサバ類の漁獲量は、盛漁期にあたる下半期の経年変化をみると、5 千～2 万トンの間で増減を繰り返して推移しています (図 5)。平成 29 年度下半期の漁獲量は 14,426 トンで、前年同期 (21,125 トン) の 68%、平年同期 (13,469 トン) の 107% でした。

例年、4 月～9 月にかけて漁獲は低調に推移しますが、1 歳魚 (25~30cm : H29 年生

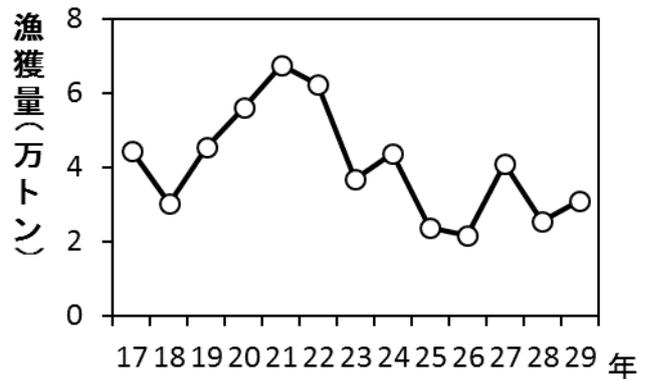


図 4. 東シナ海～日本海南西海域 (大中型まき網) によるマサバ漁獲量の推移

まれ)が漁獲の主体となり、夏以降は0歳魚(15~20cm:H30年生まれ)も漁獲されます。

山陰沖を含むマサバ対馬暖流系群の1歳魚の資源水準は、前年を上回るとされています。また、0歳魚の資源水準は予測が困難ですが、親魚量の水準からみると前年並みと予想されています。従って、全体の来遊量は前年並みか前年を上回ると考えられます。

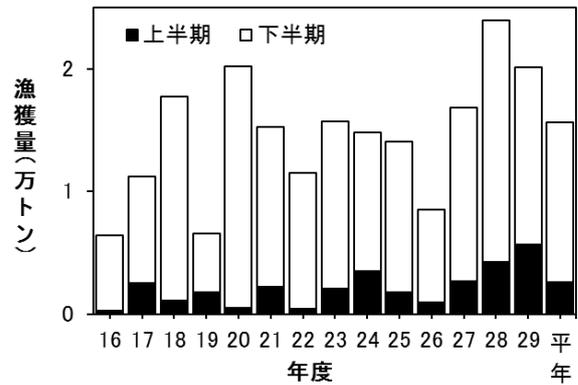


図5. 島根県中型まき網によるサバ類漁獲量の推移 (平均はH24~28年の平均値)

マイワシは前年並み

島根県の中型まき網によるマイワシの漁獲量は、平成23年から増加し(図6)、平成26年を除いて平成23年以降は2~3万トンで推移しています。

平成29年度下半期の漁獲量は14,583トンと前年同期(11,654トン)の125%、平年同期(8,237トン)の177%となりました。

今後の漁況は、漁獲の主体となる1~2歳魚(大きさ15~20cm:H29年~H28年生まれ)と夏以降の0歳魚(大きさ15cm以下:H30年生まれ)の来遊量で決まります。2歳魚の資源量は前年を上回り、1歳魚は前年を下回る資源水準であると考えられています。また、0歳魚の予測は困難ですが、直近の資源動向から前年並みであると予想されていることから、今期における島根県への全体の来遊量は前年並みと考えられます。資源動向の変化が激しく予測の難しい魚種ですが、島根県にとって重要な水産資源であるため、今後の動向を注視する必要があります。

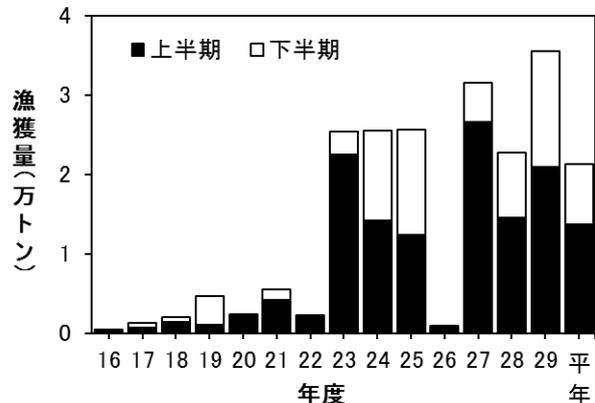


図6. 島根県中型まき網によるマイワシ漁獲量の推移 (平均はH24~28年の平均値)

ウルメイワシは前年を下回る

島根県の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は、平成23年以降増減はありますが、減少傾向が続いています(図7)。

平成29年度下半期の漁獲量は923トンと、前年同期(2,071トン)の45%、平年同期(4,524トン)の20%でした。

今後は、1~2歳魚(大きさ18cm以上:H29年~H28年生まれ)と夏以降の漁獲に加わる0歳魚(大きさ5~15cm:H30年生まれ)が漁獲の主体となります。ウルメイ

ワシ対馬暖流系群の1歳魚の資源水準は、前年を下回るとされており、直近までの漁獲状況も不漁であることから、今期における島根県への来遊量は、前年を下回ると予測されます。

カタクチイワシは前年を下回る

島根県の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、平成24年以降減少しています(図8)。

平成29年度下半期の漁獲量は2,336トンと、前年同期(597トン)の392%、平年同期(2,997トン)の78%でした。

今後の漁況は、漁獲の主体となる0歳魚(大きさ5~10cm:H30年生まれ)と1歳魚以上(大きさ12~14cm:H29年以前生まれ)の来遊量で決まります。カタクチイワシ対馬暖流系群の資源量は、近年低い水準で横ばいとなっており、1歳魚は前年を下回ると判断されています。山陰沖で、本種は3~5月に漁獲が集中する傾向にありましたが、平成30年は不漁であった昨年と同様3月までほとんど漁獲されていません。5月以降に近年の傾向どおり漁獲量が減少した場合、結果として島根県への来遊量は前年を下回ると予測されます。

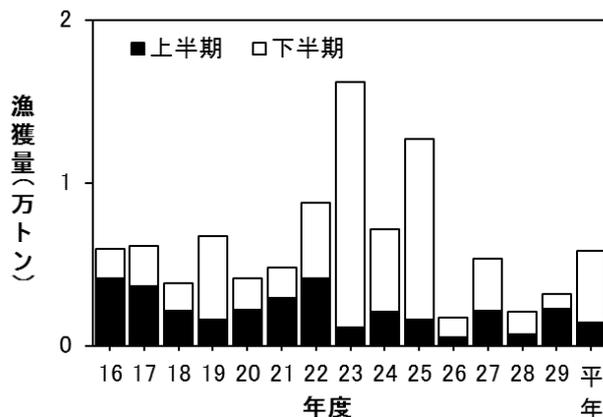


図7. 島根県中型まき網によるウルメイワシ漁獲量の推移(平年はH24~28年の平均値)

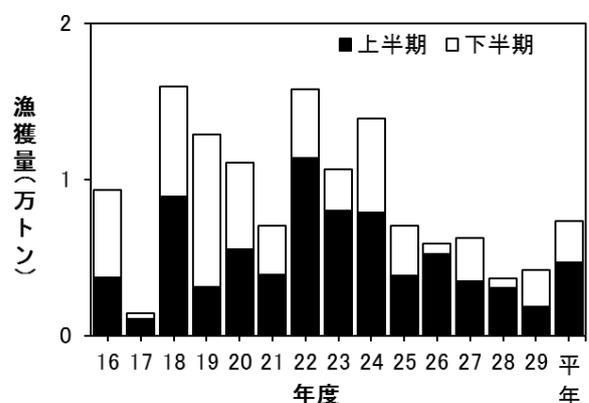


図8. 島根県中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量の推移(平年はH24~28年の平均値)